平成３０年度２回　千葉市史跡保存整備委員会　加曽利貝塚調査研究部会　議事録

１　日　時　平成３０年１１月１８日（日）　午後２時００分～午後４時３０分

２　場　所　桜木公民館　講習室

３　出席者　【委員】
谷口委員（副部会長）、岡本委員、設楽委員
【オブザーバー】
千葉県教育委員会文化財課　吉野主任上席文化財主事
【事務局】
（文化財課）滝田特別史跡推進担当課長、森本主査、大内主任主事
（加曽利貝塚博物館）山下主査
（埋蔵文化財調査センター）西野所長、松田主任主事

４　議　題
今後の発掘調査について

５　議事の概要
事務局案は承認された。依然として体制に関する課題が残るため、継続して議論していく。

６　会議経過
【開会】
（事務局）
ただいまより、平成３０年第２回千葉市史跡保存整備委員会加曽利貝塚調査研究部会を開催いたします。
この部会は市の情報公開条例により公開となっております。議事録は事務局が作成し、部会長の承認によって確定いたします。
また、オブザーバーとして千葉県教育庁文化財課より吉野主任上席文化財主事に出席いただいております。
本日の会議、高橋部会長は諸事情によりご欠席ですが、半数以上の３名の委員に出席いただいていることから、会議が成立していることをご報告申し上げます。
それでこれより議事に移らせていただきます。ここからは、谷口副部会長に進行をお願いしたいと存じます。谷口副部会長、よろしくお願いします。
（谷口副部会長）

それは次第に従いまして、会議を進行します。

報告　加曽利貝塚グランドデザインの進捗について

それでは事務局より、ご説明お願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

（谷口副部会長）

ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。

（岡本委員）

今後、グランドデザインに基づく史跡整備を文化財課の特別史跡推進班で計画し、進めていくとのことですが、博物館との業務の棲み分けをよく検討して欲しい。新博物館ができるまで加曽利貝塚の中に今の博物館が残っていくのだから、史跡整備の実務的な業務も博物館で行えるようにするべきではないでしょうか。

調査研究の体制についてもよく検討して欲しい。これから発掘調査をずっと続けていき、その成果を十分に活用していくためには、やはり今のままの体制では不十分です。以前から千葉市史跡保存整備委員会でも議論していますが、このまま埋蔵文化財調査センターが調査研究を担当していくのが適切かどうか。短期的な史跡整備と併せて検討し、解決していく重要な問題だと思います。

やはりもっと調査研究体制を充実させていかないと成果の発信も不十分になり、さらに史跡整備に伴う発掘調査も関わってくると、学術的な調査研究が停滞してしまうのではないかと危惧しています。

（滝田担当課長）

基本的にはグランドデザイン完成後に、これに基づく整備費用の予算化とあわせて、整備体制の人員要望なり、組織づくりというのを同時に関係所管と合わせていく話になろうかと思います。ですから、事業費だけでなく人員の増員・組織作りはやっていかなければと考えております。

（谷口副部会長）

それは今、この案の中には、文書としては明記されてないのですか。

（森本主査）

グランドデザインは将来像を示すものであるため、「調査研究を進めていく」といった程度の記載にとどめ、組織体制などについては明記していません。

（岡本委員）

このグランドデザインをもとにして、次のステップで調査研究や整備活用を進めていくために必要な組織体制を検討していくということですか。

（設楽委員）

私が加わっていた加曽利貝塚の保存活用計画で、その中の１つの大きな柱のようなものは、加曽利貝塚という非常に優れたものをどう活かしていくか。特に特別史跡になって、

どういった整備と活用を行っていくかを考えていました。その時に、一番新しいアイデアとして出てきたのが、博物館を「研究博物館」と位置付けて、その基に様々な活動を行っていくということだったと思います。それで今日のお話を伺うと、確かに短期と中長期というスケジュールが必要になってくるということで、その点も前の委員会でも挙がっていたかと思います。

そこで、整備を行うということを前提として、研究に基づく整備というのが望ましいということも挙がっているわけですが、そうなると先ほど岡本先生がおっしゃったように、体制作りが非常に大きな課題になってくるだろうということですね。現状の体制というものが、決して良くないというわけではないのですけど、これだけのお仕事をやっていくとなると、やはり体制の組み替えなり補強が当然必要になっていくと思います。そうなった時、３年間で短期の整備をして、それから体制作りをするというのは、やはりどうなんだろうかと思います。先ほど駅から会場までの送迎の車の中で職員の方から伺いましたが、現状ですらこちらの教育委員会の方は非常に大変な忙しさであるということですので。それはわからないではないのですが、何とかうまくいろんな知恵を絞って体制作りというものを同時並行で進めていくのが必要だと思います。あるいは３年経ってから計画を作るというのではなく、常にそれを考えつつ、３年後にはいい体制になるようなレールを敷くということも大事なんじゃないかと思います。

（谷口副部会長）

お二人の委員が懸念されているところは共通しています。それをもう少し何かこの段階で、もう少し大きな方向性を示す文言をグランドデザインに入れることはできないんでしょうか。

（滝田担当課長）

確実に、見える形で示したいと思います。

（設楽委員）

その点に関して、市長はどういうご意見をお持ちでしょうか。

（滝田担当課長）

市長的には、教育的効果については基本は任せるというスタンスです。ただ、このグランドデザイン案で示していることを全部実施すると、５０億、７０億という費用がかかるのですが、それだけの市税を投入するためには、やはり何人が来て、どうやってお金を落として、経済効果がどうだというのは、あわせてやってもらいたいという立場です。

（岡本委員）

今の体制のまま史跡整備を進めていくと、埋蔵文化財調査センターが忙しくなり、今やっているような発掘調査の体制を維持できなくなる可能性が出てきます。今の段階から継続的に調査研究や情報発信を継続的にできるような体制を整え、新しい博物館へつないでいくことを始めた方が良いと思います。

専門職員の採用は段々増えてきていますが、発掘調査体制はまだまだ不十分です。この

調査研究部会も発掘調査の成果を聞くためのものではなく、調査研究をより良い方向へ進めていくため、現役の先生方に入ってもらって議論していくことが本来の目的のはずです。

現場に加曽利貝塚博物館があるのだから、博物館の中に整備部門や調査部門を充実し、博物館と文化財課で連携できる体制で進めていくのはどうか。埋蔵文化財調査センターとの統合の話も過去に出ていますが、センターは市域全体にわたる開発に伴う発掘調査も行わなければならず、難しいのではないでしょうか。

（滝田担当課長）

そこは、今後整理して参ります。

（谷口副部会長）

例えば新博物館の設立準備室みたいなものを立ち上げて、どういうものにしていったらいいのかという検討はできないんでしょうか。

（滝田担当課長）

今考えているのが、このグランドデザインの絵を実現するためには、史跡外の部分を実現するためには、教育委員会ではできないだろうと。ですので、都市局という部門や公園の部門といったところで、どう連携していくかをこれから話し合う約束をしておりまして、絵自体はこちらで書いておりますが、そのあたりは全庁的にやっていくんだぞというところで準備室になる可能性もありますし。教育委員会内に色々な技術職員を集約して整備を進めていくという可能性もございますので、これはこの数か月ぐらいで、グランドデザインの策定と合わせて少しずつ議論が進むものと考えております。

（設楽委員）

もしその準備室というものがそういう方向でいくとすると、理想的には研究博物館というのもやっぱり一番だと思うんです。今までの行政の中に研究の博物館をつくるということも斬新なアイデアですし、それからこれからの加曽利の活動を考えるとそれがベストではないか。そうなってくると行政の中につくる準備委員会が従来型でいいのか、というところも出てくると思うんですよね。私が勝手なイメージで思い描いているのが、国立歴史民俗博物館なんです。そういうものが行政の中に小さい物ができると面白いなと思っているんですが。そうなってくると歴博の準備室も参考になるかもしれないので。ちょっと従来型の準備室ではないというか、この目標を達成するためには、どういう準備室がいるのかというところまで練っていただければと思います。

（岡本委員）

現状の体制では、研究成果を発信していく仕組みと、その成果を市民へ還元していく仕組みが弱い。今やっている発掘調査の成果をいかに市民に還元していくのかという視点が必要です。事業を継続していくためにも、市民にこういう点で研究が活用できて還元できるんだということの説明が必要になってきますよね。

城郭などでは現地に事務所があります。例えば熊本城では、熊本城総合事務所が特別史跡の中にあり、そこで発掘も行い、整備も行い、必要な技師が常駐しています。現在の加

曽利貝塚博物館の体制を充実して発掘や整備をやっていくというのであれば、既に事例があることなので、それほど難しいことではないのではないでしょうか。

（設楽委員）

先ほどの話で、市長が経済効果を心配されている。それは大変よくわかる。大きい塔を建てるとか、それは大いに結構だと思うんです。それは遺跡の中にどかんと建てるとかは論外ですけど。そうではなく、下を眺められる。私はね、非常にいいことだと思うんです。というのは富士山だけでなく、加曽利貝塚の周辺が見渡せるわけですよね。そこの中に大きい貝塚もいっぱいあるわけで。それがどういう連携をとりながら加曽利貝塚が機能していたかを、上から見るというのは一番大事なことだと思います。それ１つとっても研究に結びついてくるわけですよね。どういう設計でどういう配置なのか、どういう風になっているのか。だからそれこそ最新のデータに基づきながら、塔の上の方から風景も見られてそういう形でもいいと思います。だからそういうのってアイデアだと思います。経済効果を同研究とリンクさせながらやっていく。で今ご心配されたようなことはアイデア一つだと思いますよ。準備室の中に、アイデアを豊富に出せる人を入れるとか、そういう工夫が必要だと思います。史跡保存整備委員会にそういう集客観光を専門にされている方もいらっしゃいますし、斬新なアイデアを持っている人というのがいると思うんです。そういう方に。例えば京成の博物館駅というものが昔あって、２０年くらい前に閉じちゃって。今、再生しようということが話題になっています。日比野克彦さんが委員会に入ってもらって、アイデアを出しながらやっている。

（谷口副部会長）

パブリックアーケオロジーをやっている人に準備室に入ってもらったりアイデアを出してもらうのはいいのかもしれませんね。研究とその活用の橋渡しを研究されている人を。

（設楽委員）

松田陽さんみたいな。

（谷口副部会長）

１点よろしいでしょうか。グランドデザインの概要版の方の２章のところね。加曽利貝塚の特性・魅力を説明するところで、⑤の縄文時代観の変化というのが最後にこういうかたちでついてるんですけど、やっぱり加曽利貝塚っていうのが縄文時代の遺跡の中でも特に際立って重要なんだっていうことを冒頭に。特別史跡になったっていうのを文章の中にもそういう魅力を説明する部分を考えたと思うんですけども、こういうものを少し整理して冒頭に入れられた方がいいんじゃないでしょうか。

何か肝心の縄文時代の遺跡としての価値が付け足し的な感じがするので。

（滝田担当課長）

かしこまりました。

（谷口副部会長）

他によろしいでしょうか。

（各委員）
特になし。
（谷口副部会長）
ほかにご意見ないようですので、次第に従い進行します。

議題　平成３０年度加曽利貝塚発掘調査について

それでは事務局より、ご説明お願いします。

〔事務局説明：資料により、説明。〕

（谷口副部会長）
ただ今の説明を受けまして、何かご質問等ありますか。
未報告遺構５の完掘ができないのは、来年度はできないという意味ですか。
（松田主任主事）
来年度春頃始めて１２月に終了というようなスケジュールでは、先ほど言いましたように未報告遺構５の完掘には７～８か月かかりますし、その他にも埋戻土を除去したり、もう１回トレンチを開けなければいけないということもありますので、来年度の冬までの中で終わらせるのは難しいということです。
（谷口副部会長）
でも完掘を目指していくということですよね。次年度以降に継続して。
（松田主任主事）
完掘するのでしたら次年度以降を目指してやっていくということです。別に完掘することを目指しているわけではないのですけども、完掘するとすればその年度で長く調査するか、次年度まで引き延ばしていくか、そのようなことになろうかと思います。
（谷口副部会長）
はい。今日現場を見せていただいたわけですけれども、今のご説明を考えて、今後の発掘調査についてご意見をうかがえればと思います。
（岡本委員）
未報告遺構５を発掘していくとなると、そのための調査体制が整っていないのでは。遺構の性格を把握するための発掘調査を行う必要がありますが、今のままではまずいと思います。全てを掘る必要はありませんが、現状では住居跡かどうかもわかっていませんよね。
（松田主任主事）
炉とか柱穴を探していかないといけないと考えております。
（岡本委員）
１年目の調査で、調査区内の遺構の分布はだいたいわかっている訳ですよね。２年目の調査をここまで進めてきて明らかにできたことが少なすぎるのではないでしょうか。今回の調査区を３年で調査するとのことなら、３年間で必要な調査を終えることができる体制

が必要です。慎重にならなければならないことはわかりますが、旧トレンチの精査にこだわらず、もう少し周辺も全体的に掘り下げて確認しないと、遺構の時期や形状は全然わかりませんよね。

（松田主任主事）

そうですね。

（岡本委員）

表土を剥いだままの状態で２年目の調査も終わろうとしていますが、黄褐色土が広がっている範囲は遺構があるという想定は１年目の調査の段階ですでにしている訳ですよね。このまま手を付けずに調査を終えてしまうのはどうか。少なくとも３年なら３年でこれくらいの範囲はやりきる体制を作って欲しいと思います。発掘を進めていけば、さらに新たな謎も出てくると思うし、この範囲の中だけで解決できない問題もあります。最低限、一定の成果があり、市民にも還元できるような調査を進めていく必要があります。市民も竪穴住居より人骨のほうが興味深いですよね。土坑があるかどうか慎重に調査を進めなければならないのは確かですが、人骨は調査したほうが良いのでは。

１年間でどこまで調査するか決めた上で、調査体制を整えて欲しい。もう少し段取り良くできるのではないでしょうか。

（設楽委員）

地点を選んだ理由は何でしたっけ。それと３年間でそれをやるということの目的が３年で果たして達成できるのかとか、そこをちょっと聞かせてもらえますか。

（松田主任主事）

ここのエリアを発掘地点として選んだのは、ここの旧Ｖトレンチの中に南貝塚で唯一縄文時代晩期の住居がみつかっているところがありまして、そこがわかるように、今回調査した住居を含めて調査していることでありまして、従来加曽利貝塚でわかっていなかった貝塚・集落の最後の姿、縄文晩期という時期の様子を明らかにする目的でここの調査区を調査しております。

（設楽委員）

で、３年。来年は調査年でしたっけ。

（松田主任主事）

一応調査を開始した時点では何年ということはなく始めております。

（設楽委員）

そうなりますと、やっぱり色々な重なり合いで遺構がつくられているわけですよね。で、中期の土坑もあれば、加曽利 B の貝層もあったり埋葬もあったりと。それをどういう重なり合いでさっき言われたようなことも含めて、構造的に理解していくのかとなると、やっぱり全部掘らないとわからない。それは全部というのは極端かもしれないけれども。それはある程度は残すにしても掘り上げる。例えば未報告遺構５を掘り上げないで本当にいいのかなというところもあるんですよ。ただこれ特別史跡ですので、文化庁の指導なり判断

なりを仰いでいくことになると思うんですけど。まあその遺跡の性格を明らかにするための発掘を徐々に文化庁の方でも指導するようなかたちになっているわけですけれども。小さいこの発掘面積では。１０年かけてもいい。全部発掘すると文化庁としてはどうなんでしょうね。

（吉野主任城跡文化財主事）

計画が大事だと思います。ここで今こういったことでこういう方向で成果が出ているってものを今後どういう風に進めていくかっていうことを考える必要があると思うんです。ですのでこういったことを明らかにして将来的にこういう風にやっていきたいということもあるのでこういう風に発掘したいという話をして、文化庁がどういう風に判断するかっていうところにはなると思うんですけど。いずれにしても最初から始まった時には、とにかくとりあえず始めるという雰囲気で始まったと思うので、これまで２年くらいやってきて、どういうところが落としどころで、どこに目玉をもった調査にするのかを考えること。お金と時間があればずっと続けることができると思うんですけど、それにしたって何の目的なのか。これをやったら次は他にこれを何十年もやることが目的としていいのかどうかということもあるので、そういったことを考えた方がいいのかなと。最初とりあえず３年を今の状態でやりましょうということで。その後はしっかり目的と計画をもって調査しましょうという話だったと思うんですよね。前回の委員会でも、そろそろ発掘調査の全体の目的とかを考えなければいけないんじゃないかということでお話があったと思うんですけど、私は全体の計画というのもそうですし、ここの部分をどういう風に決着つけるのかということは、そろそろ考えなければいけないんじゃないかなと思っております。３年の間に、どこか１つ明らかに「ああこういう成果だった」というのがいえればいいなと思います。私ちょっといいたかったのは、８５号住居というのをどんな住居跡だったというのがはっきりわかる形には最終的になってほしいなと思います。もちろんデータは残さないといけないんですけど、柱穴が東側は壁柱穴が廻りそうだけど西側はよくわからなそうだという話もあったんですが、そういうのがはっきりと本当にそういう状況だというのが分かる形で成果が出て、こういう住居が晩期の住居だということが示せたり。未報告遺構５がどこまで掘れるかという話があったんですけど、全部掘れないまでもこんな遺構だというのがわかって、将来につながるようなメッセージになるような成果になるといいなと思ったりしました。どういう風に掘るかというのは、設楽先生がおっしゃるように、ここをずっと掘るのかということも含めて考えて欲しいなと思っています。以上です。

（谷口副部会長）

やっぱり未報告遺構５のそこで止めちゃうと結局性格も遺構の実際もよくわからないままになっちゃうと思うので。あそこまで掘ったのなら掘って、きちんと研究することをしないといけないんじゃないでしょうかね。

（岡本委員）

それは今の体制じゃ無理だっていうんだよね。日数的にも予算的にも今のやり方で進め

るとできないということでしょう。
　私が一番危惧しているのは、今進めている学術調査が止まってしまうことです。今まで掘るなと言っていた文化庁が、加曽利貝塚はわからない部分が多いから新しい成果を出して発信していって欲しいということで認めてくれている訳ですから、何らかの成果を出していかなればならない。そのためにも今のうちに新しい成果を出しながら継続的に進めていける調査体制を整えておかないと。いずれ整備のための調査が始まった際、学術調査はいつでもできるのだから今やる必要がないという声が必ず出てきます。全部発掘する必要があるとは思いませんが、未報告遺構５は本当に住居跡なのかどうか、今回の調査区の中に晩期の住居が何軒あるのかは少なくとも明らかにしなければならない。しかし、いつまでも時間をかける訳にはいかないのだから、全体としてどう進めていくのか方針を決めて調査を進めていかないと益々忙しくなり、学術調査を継続的に進めていくのは難しくなってくるのではないか。掘れば掘るほどわからないことがいっぱい出てくるでしょうから、どこまでこだわっていくのか。
（松田主任主事）
　一応ここの調査は晩期集落の最終末を明らかにするということでやっています。色々な時期に手を出すほど当初の目的達成は薄くなってしまいますし、岡本先生の言われているように下面を掘るともっといろいろなものが出てきますので、晩期の集落の様子を明らかにすることが、重要と思って掘っております。
それと未報告遺構５を掘って晩期の他の遺構はその年にやらないか次の年にするか、あるいはそうではなくて両方をやって来年度で終了とするか、長・中期的な計画と合わせながら検討するのが、これから次回の委員会までにやらなければならないと思っているところです。
（岡本委員）
　慎重にやらなければならないが、もう少し人数を増やすなど、やり方を考えるべきではないか。これくらいの範囲を発掘するのにどれくらいの期間や人数が必要かまず検討し、成果を出すための体制を考えたほうが良い。未報告遺構５も全部丸裸にしろと言っている訳ではないが、少なくとも時期や構造は明らかにする必要があります。８５号住居跡も昨年、思うように調査が進まず、やっと今年成果を出せるところまで来た訳ですよね。来年は未報告遺構５が住居跡であることが分かればいいのかといえば、他にもやるべきことはいろいろあります。土坑も断面を少し掘れば遺物が出てくるはずで、それほど時間がかかるとは思えませんが。できるだけ多くの成果を示すことができる調査体制を考えるべきです。
（松田主任主事）
　完掘でなくてもということですか。
（岡本委員）
　時期を確定できれば、完掘にこだわらなくてもよいのでは。時期がわからないまま調査

を終えてしまっては解決につながらないですよね。
（松田主任主事）
　それについては、今後の電源ケーブルが退いて遺構の新しい覆土が掘れるとなればやれると思います。
（岡本委員）
　電源ケーブルは来年度に移設する予定ですか。今年度の予定だったのでは。
（森本主査）
　電源の関係は事業者に見積もりをお願いしている状況です。やり方も含めて検討してもらっています。
（設楽委員）
　前に話した人骨ですけど、なかなかこれをどうやったらいいかと残しておいた方がいいのか掘るべきなのか。そこのところを人骨の専門家に聞いてみてと言ったと思いますが、あれはどうでしたか。
（西野所長）
　人骨で我々もやっているので、骨自体を残せばいいのかというのは、人骨の先生でなくても我々でも判断できると思っているんですね。
　それで実際に調査する段階になれば、坂上先生に相談しようと思っているんですけど、そうではなくて今この状態で見てもらっても、一般的なことしかいえないと思いますので、今まだ相談していません。これを調査するかどうかは、先程のように貝層を掘るかどうかというところなので、それをちょっと来年度以降は貝層の調査も考えたいと思っています。晩期のことを知るのが主の目的ですけど、一方で時期のわかる貝層の資料もほとんどないので。だから土器のところでスポット的にでも、サンプリングだとかっていうのは開けた時には最後にできると思っているんですね。その辺もあわせて人骨も貝層の話を考えた上で検討したいと思います。
（岡本委員）
　同じ場所を何回も発掘したり埋めたりしているのは、人骨や貝層の保存上良くないですよね。翌年度発掘してみると、前年の状態を保っているとは限らず、哀れな姿になっている場合も多く見られます。あまり開け閉めを繰り返さない調査の進め方が必要です。貝層も部分的なサンプリングであれば時間はかかりませんよね。
　予算も含め、もう少しこの範囲の中を発掘できませんか。昨年度から変わっているのは、８５号住居跡の西側を明らかにしたということぐらいですよね。
（松田主任主事）
　あとは他のトレンチをあけて未報告遺構５の範囲が分かった。黒色土を掘っている範囲はかなり広くなったと思いますけど。
（岡本委員）
　少なくとももっと発掘できるような調査体制を整えて欲しいと思います。発掘が進まな

いのは調査担当者の問題ではなく、調査体制が整っていないことが要因な訳ですから。
（谷口副部会長）
今日、現場を拝見して興味深く思ったのは、削平ですね。自然の堆積が元々あったところを、縄文後期の頃でしょうか。ある段階でかなり意図的に削平しているという状況でしたよね。あれが理想的には南貝塚のような範囲でどの程度の規模で行われているのかというのは興味深いけれども、それを広域にわたって調査するというのは難しいとは思いますが、少なくとも今開けている範囲であれが特定の遺構の削平に伴う局所的なものじゃなくて、かなり面的にそういうことをやっているのかどうかというのは遺跡の形成過程を考えるデータとしてはすごく重要だと思うけれど。それはもう少し調べられないでしょうかね。
（松田主任主事）
遺構がかかっている部分でなくて、他の部分も土層断面を見ながら調べていくということにより、それには近づけるとは思います。
（谷口副部会長）
ちょっと今日清掃されていた方は少し発掘がもう少し深度が下がらないとそういうこともわからないですよね。
（岡本委員）
ハードローム層が直接露出しているということは大規模な改変をしているよね。
（谷口副部会長）
その土はどこに行っちゃったんだろうという風に思いますし。
（岡本委員）
それからあのソフトローム層のような黄褐色の土層の中から遺物が出てくる訳ですよね。あの土層がどのように堆積したのかという問題は今回の調査範囲の中だけではなかなか解決できないかも知れない。研究テーマとしては新しいものだし、遺構が重なっていることもあって一筋縄ではいかない状況は良く分かります。
（谷口副部会長）
それではよろしいですか。次の議題について、事務局から説明お願いします。

議題　今後の発掘調査について

それでは事務局より、ご説明お願いします。
〔事務局説明：資料により、説明。〕
（谷口副部会長）
ただ今の説明を受けまして、何かご質問・ご意見ありますか。
（岡本委員）
この発掘調査は誰が担当するのですか。
（森本主査）
学術的な調査との兼ね合いになるのですが、その調査期間以外の時期に埋蔵文化財調査

センターが担当していきたいと考えています。
（岡本委員）
　加曽利貝塚博物館に調査を担当してもらったほうが良いのでは。
（森本主査）
　現状として調査の機材も埋蔵文化財調査センターで用意しており、加曽利貝塚博物館ではなく、埋蔵文化財調査センターで調査体制を組んでいます。
（岡本委員）
　埋蔵文化財調査センターから調査体制ごと加曽利貝塚博物館へ移すことが必要では。加曽利貝塚博物館で発掘調査や史跡整備を行い、将来の構想までつなげていくのが良いと思います。センターは民間開発に伴う発掘調査も対応していかなければならないのだから、来年度に向けて、加曽利貝塚博物館と文化財課で進められる体制を検討してください。
（西野所長）
　現実的な問題として、整理作業を埋文センターでやらざるをえないですよね。場所がないですから。
（岡本委員）
　今の博物館でできなくても、埋蔵文化財調査センターでなく、加曽利貝塚の近くに整理作業ができる場所を確保しないと。史跡整備に関わることまでセンターで対応するのはおかしいと思いますが。学校の余裕教室を利用したりして、人員や機材を移せば体制がすっきりするはずです。今のままでは加曽利貝塚で全部できないのはわかりますが、もう少し円滑に進めることができる体制を詰める必要があります。
（谷口副部会長）
　これは現状変更の特別史跡内の申請をするんですよね。来年度申請をするんですか。
（森本主査）
　予算の関係になりますが、早ければ来年度から着手します。
（設楽委員）
　今、岡本先生が言われたことの繰り返しになるかもしれませんが、ゆくゆくできる新博物館には当然のことながらセンターをどういう形でやるかということになってくると思うんですよね。だから先ほどの話もありましたように、準備室をそれなりにその準備室あるいはできるだけ早く新体制に向かって、センターをどうするかという構想も含めて、話し合いを持っていった方がいいんじゃないかと思います。
（岡本委員）
　全く新しい組織を作るのではなく、既存の組織を改善して、円滑に発掘調査を進められる体制を整えるのが良いのでは。加曽利貝塚の調査研究に関する業務を埋蔵文化財調査センターから加曽利貝塚博物館へ移せば良いと思います。
（谷口副部会長）
　やっぱり今調査の個別の内容の話というよりは、組織体制の話になりますので、それが

重要な課題かなと思いますから、次回までにそこを少しご検討いただいて次回またご提案いただけるようにお願いしたいと思います。他にご意見ないようですので、終了いたします。

それでは、これを持ちまして本日の議事を終了します。進行を事務局へお返しいたします。

（事務局）

委員の皆様、長時間にわたりご審議いただきありがとうございました。

以上を持ちまして、平成３０年度第２回千葉市史跡保存委員会加曽利貝塚調査研究部会を閉会いたします。

――了――

問い合わせ先　千葉市教育委員会生涯学習部文化財課
ＴＥＬ　０４３－２４５－５９６０
ＦＡＸ　０４３－２４５－５９９３